

梅ちゃん 七十二才

小澤 孝子

宮下和子は、静岡市葵区追手町に在る、あるビルの七階でエレベーターを降りた。二、三歩、歩くとそこがギャラリーの入口だった。

谷口明日本画展と大きく書かれた会場に、和子は足を踏み入れた。受付で芳名帳に記帳し、そこで戴いた作品目録を手にして会場に目をうつした。谷口先生は、五、六人の人達と一緒に多分絵の説明をしているのだろう、少しづつ絵の前を移動していた。

二、三人で鑑賞している人、一人ですっと絵の前に佇んでいる人等、数十人の人達が静かにそれぞれの動きをしていた。

和子が作品目録を開き、歩き出そうとした時 「ちょっと失礼、人ちがいだったらごめんなさいよ。ひょっとして和子さんではないですか」 えっ？ 私？ 和子がその声のした方を見ると、受付より二メートル位離れた南側に椅子に腰かけていた男の人に声をかけられた。「はい、和子です、和子と申します」 和子は声をかけられる迄、その人には全然気づかなかったが、その人は谷口先生同様中学の時の体育の先生の山田雅之先生で



あった。

山田先生の前にはテーブルがあり、先生は湯呑み茶碗を手にしていた。

「山田先生お久しぶりです。随分長くお会いしてませんけど全然お変わりありませんね」「あゝやっぱり和子さんでしたね。よかった人ちがいでなくて」そう言って笑った。

「もう作品はごらんになられましたか？」

「はいゆっくり見させて戴きましたよ、僕はまだここにいますからどうぞごらんになっていらっしやい」和子は「では拝見して来ます」と会釈をして丁度皆から離れて受付の方に歩いてこられた谷口先生に御挨拶をした。和子は谷口先生には中学の三年間、美術の授業と部活の美術部、そして生徒会の顧問として厳しくお教え戴いた。先生は今、九十才というお年であるが四、五年毎に絵画展を開き、その度に拝見させて戴き、先生の作品も四点ほど自宅に飾らせて戴いているのだ。

先生はわざわざ家まで来て下さり先生自身でそれ等の絵の飾り場所を決めて下さった。

山田雅之先生は担任になった事はなかったが三年間体育でお世話になったのだ。

和子は端の方からゆっくりと作品をみていった。静物、花、風景、人物どの作品から先生の人となりがかがわれ、その静謐なたたずまいの画風に唯々深く感銘していた。特に富士山の今までみた事もない紫色を基調とした格調高い作品の前から動けなかった。それにはすでに売約済らしい紙片が額のかたわらに貼られている。

山田先生の所へ戻ると「どうでしたか、谷口先生のお年を感じさせない作品ばかりだったでしょう」「本当にすばらしいですね、毎日眺めていたい作品ばかりです」

「それにしても和子さん、貴女姿勢がいいですね、ずっと背すじが伸びていましたよ」

「あらそうですか、ありがとうございます」

「和子さん、お年はいくつになりましたか」

「自分でもびっくりですけど六十五才です」

「ほう、六十五才ですか、僕は七十五才です」

「あら、先生と十才ちがいったんですか、中学の時は、ずっと年上だと思ってました」

「大学出て初めての中学だったんですよ、和子さんの担任になった事はなかったけど、貴女は成績もよく運動もできてその上美少女だったからぼくはすぐ貴女の事覚えましたよ、それにしても長い年月がたっているのに私がすぐ和子さんでわかったって事は、貴女が上手に年を重ねてきたって事だと思いますよ。幸せだったんですね」先生はそう言った。

「そう言って戴きとても嬉しいです。ありがとうございます」沢山、沢山教え子がいる中でこうしてはるか昔の私を覚えていてくれた事が和子はとても嬉しかった。

「いっぱい話したいから、これからお茶でもいかがですか」先生は言った。

「先生、私ももっとお話したいのですが申しわけありません。実はこれから静岡病院へお見舞にいくんです」和子はずっと下げていた紙袋をちょっと持ち上げて言った。和子の実の兄がもう長く入院しているのだ。

「それじゃあ仕方ありませんね。ぼくは毎日ひまでね、ゴルフの仲間も、釣りの仲間も、山登りの友達もみんなそれぞれ身体にいうところをかかえていてね、僕自身も医者へ行けば悪い所は一杯あると思いますがね」

「先生、よろしかったら私の家に遊びにいらして下さい。いつでも結構ですよ」

和子は手帳を破って家の地図と電話番号を渡した。「あゝ、僕が前にいた中学校のすぐ近くだね、場所はよくわかりますよ。」

和子は谷口先生と山田先生に挨拶をしてギャラリーを後にした。山田先生は体育の先生だが、子供の時から絵を描くのが好きだったそうで、退職してから谷口先生の所で絵を書いているといった。いつか僕の絵も見てくださいね、先生はそう言った。



和子は義母八十四才、義母の妹の梅子七十二才との三人暮らしである。ちなみに義母は長女で下の二女、三女は他家へ嫁ぎ梅子は四女である。和子の一人息子は他県で暮らしている。駿河区の登呂遺跡より五百メートル程南の静かな田園地帯に住んでいる。

婿養子だった義父は、六年前風邪が元の肺炎で八十三才で他界している。そしてその一年後、和子の夫の進は五十九才で急逝した。

五年前の五月十五日の朝、進は「行ってくるね」といい和子も「いってらっしゃい、気をつけてね」そう言った。進は建設会社に勤めていた。自転車にまたがり進は和子を振り返った。何？　と思いい進に近づくと思はじくと和子の顔をみた。「愛してるよ、和子」と言った。「えっ、あ、ありがとう、私も愛してるよ、ありがとう」和子は戸惑いながら言った。普段絶対こんな事をいう進ではないのだ、和子がふざけてたまに

「お父さん私の事愛してる？」という

「口に出して言わなければわからない様な馬鹿な女か」

「だって言ってくれなければどう思ってるか全然わからないもの、じゃあ愛してくれてると思っていんだ」「あたり前だ」そんな馬鹿げたやりとりをした事も度々あった。でも今朝「愛してるよ」と言ってくれた。ウフ、嬉しいよ私。和子は年甲斐もなくスキップして家に入った。

進の勤務先より午前十時十五分に電話があった。進が突然倒れ、市立静岡病院に搬送されたと。

「大丈夫でしょうか、意識はしっかりしてますか、しゃべれますか」和子の矢つぎ早やの質問には何も答えてもらえず、とにかく一刻も早く病院へと言われた。一緒に行ってくれるという梅ちゃん（和子は結婚当初からそう呼んでいる）と病院へかけつけた。

進は二度と眼をあける事はなかった。急性心不全といわれても和子は納得できなかった。お父さん、こんな突然の別れ方なんて嫌だ、嫌だよ、お父さん、今朝愛してるって言ってくれたじゃない。私との別れの言葉だったの、お父さんお父さん、和子は進にすがりついて泣き叫ぶばかりであった。

和子が谷口先生の個展を観にいった日から一週間経った三月二十四日、山田先生から電話があった。明日伺ってもいいかという。どうぞどうぞ、是非いらして下さい、お待ちしております、と和子は言った。

今日は三月二十五日、朝から青空が広がり天気予報では昨日と同様今日も二十四度位の暖かさになるといった。

和子と梅ちゃんは、台所で忙しくしていた。畑から採ってきた露を煮て四つの小鉢に盛る、筍と荒布の煮物も深い鉢に盛りつける、少し甘くした卵焼、小松菜のごま和え、れんこんのきんぴらもそれぞれ盛りつける。和子はエビフライを揚げていく。義母は座敷のテーブルに、ランチョンマットを敷きおしぼり、箸置き、とり皿を手際よく並べている。明け放った座敷から義母が大きな声で台所へ呼びかけた。「先生がお見えですよー」梅ちゃんと和子は玄関へ走り、義母と三人並んで坐り先生を迎える。先生は駐車場から庭を眺めながら、ゆっくりゆっくりあけ放った玄関にやってきた。

「いらっしゃいませ」義母と梅ちゃん、和子は揃って頭を下げる。

「よくいらして下さいました。私が姑のさわ子、これは私の妹の梅子です」又三人揃って頭を下げる。

「ごていねいな挨拶ありがとうございます。私は山田雅之と申します。和子さんとお会いして嬉しかったものですから、いろいろ話がしたくて来てしまいました。」

「話は聞いております、どうぞお上がり下さい」義母が言い三人は立ち上がった。先生は近くの肉屋の焼豚だといって包みを和子に渡した。「いただきます」梅ちゃんと和子は台所へ行き、座敷へ料理を運びはじめた。

先生は開け放った縁側に立ち

「すばらしい庭ですね、広いですね、僕の家は敷地が五十坪弱で庭なんてないんですよ、車を停めるスペースしかないんです。こんな庭だったら一日眺めていたいですね」と義母に言っている。このところの暖かさで芝生が青く萌え出し、金木犀、紅葉が芽をふき数本の松の緑も鮮やかになり、満天星もすずらんに似た花をびっ



しりと咲かせている。大小の石のかたわらのつつじが咲き、蹲のまわりには石路が濃い緑を輝かせている。そんな庭から先生はいつまでも目をはなさなかった。

先生からの焼豚もレタスを敷いた大皿に盛り、テーブルが整った。梅ちゃんが

「先生、お飲み物は何がよろしいですか」

「私はお茶をお願いします。車じゃなくても一滴もお酒は飲めないですよ、随分挑戦したけど駄目でした」
「どうぞ先生お坐り下さいな」義母が上座をすすめ、その横に坐り梅ちゃんと和子は二人の向いに坐った。和子達三人はいつもお客様があるとお酒を飲む、自動車のお客様でもいつも代行を頼んで一緒に飲む、先生は下戸だという、義母は

「先生、私たちお酒をいただきますね」そう言った。和子達三人はそれぞれの銚子からお酒を手酌で注ぐ。先生は箸を使いながら

「ちょっとおたずねしますが、それぞれのつれあいの方々は今日はお仕事ですか」

「先生、私たちこの三人家族なんですよ、今日は久しぶりに男の人がいらしてくれてとても嬉しいですよ」
義母はそう言って猪口を口に運んでいる。そして義母は自分の連れ合いの死、和子の夫である自分の息子の死、そして梅ちゃんが独身であると話した。ほんのり酔いのまわってきた梅ちゃんが

「先生、私白馬に乗った王子様がくるのをずっと待っていて、七十二才になっちゃいました」そう言って笑った。

梅ちゃんは、赤ん坊の時から股関節脱臼で田舎で昔の事で見のがされていて、治療がおくれ左足の運びが少し不自由だった。それは障害という程のものではないが、少し左足をひきずって歩く事があるのだった。それでも自転車も乗るし、自動車も七十才で免許返納する迄、和子よりよっぽど巧い運転をしていた。梅ちゃんは器量もよく、頭もよく和裁の腕は超一流で若い頃から市内の大手の呉服店の最高級の着物の仕立てをし、店の信頼も厚く和子は今まで梅ちゃんのお陰で様々なすばらしい着物をみせて貰ってきた。だがある時期から着

物の需要がどんどん減ってきて、今では礼装の留袖や黒の喪の着物、成人式の着物等貸衣装ですませる人が多くなり、梅ちゃんはおかねで自分の予定していた通り、七十才ですっぱり和服の仕立てをやめた。梅ちゃんは若い頃それなりに縁談話も度々あったのだが、何故か縁がなく七十二才になっていた。

進と和子の結婚が決まった時、梅ちゃんは進に言った。進のお嫁さんに気をつかわせては悪いからアパートを借りようと思うと。進は即座に言った。

「梅ちゃん、何を言う、ここは梅ちゃんの家じゃないか、梅ちゃんが生まれた家じゃないか、そんな事言ったら親父だっておふくろだって怒るよ。梅ちゃんは俺が小さい時からずっと可愛がってきたよ、俺が選んだ和子だ、和子が梅ちゃんにいやな思いをさせる様な事をしたら、俺が許さねえ、俺は梅ちゃんの最後の最後までしっかり面倒みるから二度とそんな事言わねえでくれ」梅ちゃんは泣きながら進に頭を下げ、進は優しく梅ちゃんの肩を抱いた。

結婚してからの和子は、梅ちゃんの人柄とその竹を割った様なさっぱりした性格にすっかり魅いられてしまっていた。ちょっと年上のお姉さんの様な気持ちで「梅ちゃん」と呼ばせて貰い、料理から編物、パッチワーク、書道から短歌俳句まで教えて貰い、和子が読書が好きだと知ると義母と梅ちゃんの読書ノートを見せてくれ、すぐ和子のノートも用意してくれた。義母も年に八十冊、梅ちゃんは百冊以上読んでいて和子はびっくりした。梅ちゃんは新聞の読書欄や本の広告、婦人公論の書評等読むとすぐ図書館へ行き、リクエストしてきた。本は二週間借りていられるので、三人で順ぐりに読む事もあり、読み終わらない時は一度返却して借り直す事もあった。三人で読後感を話し合う事もしょっちゅうありそれはずっと続いていてとても楽しい事の一つである。

義父は農協に勤めていたが、義母梅ちゃん、進をこよなく愛し、そんな和やかな中に迎えて貰い和子は心から感謝していた。



山田先生は筍ごはんが大好きだといっておかわりした。ぼくは朝はコーヒーだけ、昼はコンビニのおにぎり、夜もコンビニの弁当ですませ、ここ数十年野菜など意識して食べてなかったといい、小松菜のごま和えもおかわりした。

先生はずっと石部に住んでいるといった。三十才の時、学校で知りあった音楽の先生と結婚したそうだ。先生は野球部の部活で、奥様は吹奏楽部、合唱コンクールの指導とそれに加え担任の仕事と多忙をきわめ、毎日二人は時間に追われての生活だったという。一人娘を保育園に預けても迎えに行くのは、いつも最後で娘にもずっと淋しい思いばかりさせていたという。そして奥様は、四十代後半で体調をくずし子宮癌とわかり、余命半年といわれたが闘病二ヶ月で、四十八才でなくなられたという。先生は五十才だったという。一人娘は今、神奈川の高校で音楽の教師をしているという。

義母も義父をなくし、和子も進をなくし、先生も又奥様をなくされ、こうして皆大切な人達を送り、早い遅いはあってもつらい別れを乗り越えて生きていかなければならないのだ。それが生きとし生きるものの宿命なのだ。先生は

「良寛さんも『散る桜残る桜も散る桜』っていつているじゃあないですか。いづれ皆彼岸へ行くんです、お互いもう若くないのだから、前をみて日々楽しい事をみつけて生きていきましょや」そう言った。五時前、先生はお帰りになるといった。梅ちゃんは

「先生、お夕飯にお持ち下さいな」そう言って筍ごはんを折りに詰め、もう一つの折りにエビフライ、卵焼、れんこんのきんぴら等を詰め、義母はデコポンとキウイ数個を袋に入れて渡した。先生は

「今日はとても楽しかったですよ。こないいい日は近頃なかったからとても嬉しかったです。ありがとう」そう言って三人と握手をして帰られた。

三月二十五日 義母の日記

和子が中学時代お世話になったという山田雅之先生がいらした。体育の先生だったそうで、白髪のスーツ刈りで顔は浅黒く背は百八十センチとかで、スリムな体型（やせすぎ？）で足が長く格好いい。

話の中で明日は、トマト、いんげん豆、さやえんどうの定植をしようねと、和子と話していると、ぜひ一緒に畑仕事をさせてくれと。先生は土いじりがしたいと、明日先生はいらっしゃるらしい。

三月二十五日 梅ちゃんの日記

山田雅之先生がいらした。和ちゃんの中学の時の先生。

「梅子さんは八千草薫さんにそっくりですね。皆さんに言われませんか」
「はいよく言われてきました」これ本当の話、よく言われて来たのだ。

先生は昔私が好きだった、俳優の池部良に似ていると思った。夜和ちゃんにそう言うところ「ああそう言えば池部良に似ているね。じゃあ先生は梅ちゃんの好きなタイプだね」そう言ってアハハと笑った。私もアハハと笑った。

三月二十五日 和子の日記

今日山田先生がみえた。義母も梅ちゃんも本当によくもてなしてくれて、私は二人に心から感謝、ありがとう。

山田先生はその後、何度も和子の家へやってきた。畑仕事といっても家の東側の二百五十坪程の畑で、義母と和子が楽しみながらやっている家庭菜園なのだ。義母と和子が畑仕事をしている時は、梅ちゃんはいつも庭の芝生の中の草とりをしている。

先生はこうして土いじりをするのが夢だったよ、そう言って里芋の畝作りと植えつけ、馬鈴薯の土寄せ、小



松菜の種まき、人参の種まき、とうもろこしのポットまき等喜々として手伝ってくれていた。

四人で食べる昼食は、梅ちゃんは「先生、野菜沢山食べなければ駄目ですよ」そう言って野菜料理を一生懸命作り、ヒレカツの皿には千切りキャベツも山の様に添えていた。

昼食後は四人でお茶を飲みながら、四方山話をし先生はいつも三時頃帰られた。

「先生、お夕飯にめしあがれ」梅ちゃんはそういつて大きめのタッパーに、雑穀米のおにぎり二個、筑前煮、煮卵、いんげんのごま和え、から揚げ、プチトマトを入れ風呂敷に包み先生に渡した。

五月の連休が終わった十二日、又先生が見えた。和子と梅ちゃんはいつもの散歩にでかけるところだった。梅ちゃんはこの頃散歩の時は右手に杖を持つ、梅ちゃん曰く、転ばぬ先の杖なのだと。先生が

「梅ちゃん、（先生も梅ちゃんと呼ぶ様になっていた）こうして和子さんとしっかり左手をつないで歩くと左足にも力が入って杖なしで、上手に歩けるよ」そう言って梅ちゃんの左手をしっかりと握って少し歩いた。

「あら本当だ、左足がしっかりしてる」梅ちゃんはそういつてにっこりした。和子がそばに行くと梅ちゃんは「和ちゃん、今日は先生と一緒にいい？」そういつて和子に杖を渡した。

「どうぞ、どうぞ先生もいいですか」

「じゃあ三十分位歩いてこようね」先生は梅ちゃんにそういつて二人で道路へ出て行った。

しっかりと先生と手をつなぎ、赤いナイキのスニーカーをはいた梅ちゃんは、何だかとても楽しげな後姿であった。

五月十二日 梅ちゃんの日記

いつも和ちゃんと行く散歩を山田先生とした。「男の人と初めて手をつないだ、すごく嬉しい」私は本当にそういつたのでそういつと、先生は「そうなの、ぼくは二十五年ぶりだよ」

「えっ、そうなんですか、じゃあ奥様がなくなられてから、女の人とおつき合いなかったんですか」

「なかったなあ、部活で土、日もなく日々の生活に追われて気がついたらこの年になっていたよ」

「先生、私キスした事もハグした事もなくてこの年になっちゃいました」私、先生に何てこと言ってるんだろう、まるでそんな事したいみたいだねえ。

「そうなの、じゃあ機会があったら僕と仲よくしようか」先生は私の顔をのぞきこんでそう言った。私は小さい声で「私も先生と仲よくしたい」先生、私の声聞こえましたか。先生はぎゅっと私の手を強く握って何も言わなかった。

梅ちゃんは、何度も先生と手をつないで散歩した。そして散歩の時間もどんどん長くなった。「和ちゃんごめんね、お昼の仕度手伝わなくて」

「そんな事気にしないで、今日は天気がよくて気持ちよかったですよ」和子は梅ちゃんにそう言った。先生はうがい、手洗いがすむと縁側の籐椅子に坐っている義母の所へ行き、

「この辺の海岸も砂浜がなくなったねえ、石部の海岸も砂浜が少なくなりました」

「私が子供の頃は、波うちぎわまで百メートル以上あったのにねえ」義母が言った。

梅ちゃんは世間話をしている二人にお茶を出し、台所を手伝う。具沢山のみそ汁、金目鯛の煮付け、しいたけとエリンギのオイスター炒め、なすときゅうりの糠漬で四人で食卓を囲む。こうして四人で食事する事に、何の違和感もなく四人家族の様に思えて和子はふと梅ちゃんを見ると、梅ちゃんはこのこして先生を見ていた。

南瓜の定植と草とりを終えて、義母と和子が家に入ると電話を終えたらしい梅ちゃんが受話器を持ったまま坐りこんでいた。

「どうしたの、誰から電話？」義母が聞くと「山田先生なんだけど、私に明日石部へ遊びにこないかって」「先生の家へってこと？」和子が聞くと



「うん、そう言った。」

「何て答えたの？」義母が聞くと「行くなって言った」梅ちゃんはそう言って義母と和子の顔をじっと見た。そして

「お姉ちゃんと和ちゃんに相談してから返事すればよかったね」そう言った。

「相談なんてしなくていいよ。行くなって言ったなら行っておいで。ゆっくりしてくるといいよ」義母は優しくそう言った。

五月二十六日 梅ちゃんの日記

私、生まれて初めてキスをした。山田先生とキスをした。先生の家の玄関の三和土で、先生は私を力一杯抱きしめてくれた。私は靴をはいたまま背のびして先生に抱きしめて貰っていた。そして気がつくとりビングのソファーに坐っていた。先生は台所にいた。

「梅ちゃん、せまい家でびっくりしたでしょ、築五十年のボロ家だけど娘も静岡へは帰ってこないというし、僕ももうじき老人介護施設へ入らなければならないと思うから、こんな家がまんしてるんだよ」素晴らしいながらお湯をわかせてお茶の用意をしてくれているらしい。そしてかさこそとビニール袋をあける音がして、先生はここへ来る時買ってきたコンビニのおにぎり、サンドイッチ、から揚げをテーブルに並べているらしい。「さあ梅ちゃん食べよう」「はい」と言っただけで何故か立ち上がれないでいると先生が来て、両手を私の脇の下に入れ立たせ、又力一杯抱きしめてくれた。そして台所の椅子に坐らせてくれた。私はそこで初めてポシェットを斜めがけたままだった事に気づいた。

私の七十二才、記念すべき七十二才、私はおくれげながらとうとうはじめての体験をした。先生は優しく、優しくしてくれた。先生はずっと私を抱きしめていてくれた。こんな体験、私は考えてもいなかった。私は涙がとまらなかった。先生、先生ありがとう。

五月二十六日 義母の日記

夕方六時五十分頃梅子が先生に送って貰って帰ってきた。おそばを食べて来たと言った。

先生は私と和子に

「明日は谷口先生の処へ伺うので、又近い内におじゃまします」そう言った。梅子は先生の車の所までいき、いつまでも戻ってこなかった。梅子はどうも先生が好きらしい。

五月二十六日 和子の日記

夜、義母が自分の部屋へひきあげたあと梅ちゃんは

「和ちゃん、一緒にワイン飲んで」

「いいよ、飲もうね」梅ちゃんは今日一日を話してくれた。梅ちゃんよかったね、本当によかったね。私は嬉しくて心から喜んだ。梅ちゃんは七十二才だが六十五才の私より若くみえ、色白の顔はしわもなく何といっても八千草薫似の美人なのだ。百六十センチのスリムな体型で誰がみても七十代なんて思わないだろう。先生よかったね、梅ちゃんに会えて、梅ちゃん、よかったね先生に会えて、二人でしっかり愛を育んでいてね。応援してるからね。

六月になった。なんて暑いんだろう。毎日真夏日である。梅ちゃんが先生の家を訪れてからもう二十日以上になる。先生から何の音沙汰も無い。和子は毎日先生の家に電話してみるがいつもつながらなかった。

義母は

「先生どうしたただかね、じゃがいもの収穫ばくにやらせてねっていったのに。和子明日にでも掘ろう」そう言った。



「そうだねえ」梅ちゃんはだまって新聞の記事を切り抜いていた。黙っている梅ちゃんが一番先生が来てくれるのを待っているのだ。和子は梅ちゃんの心中を思うといても立ってもいられない。

「梅ちゃん、私先生の家に行ってくる」

「私も行きたい」梅ちゃんはそう言った。

その日の午後、和子と梅ちゃんは先生の家へむかった。和子の実家は広野なので、用宗や石部の同級生は大勢いたのでその辺の地理には詳しい。百五十号線を北に折れ、この辺だよねえ、前田幸枝さんの家は、そしてその北が山田先生の家だったと思うよ、そう言いながらゆっくり車を停めると梅ちゃんが

「和ちゃん、ここ、ここが先生の家だよ」と言った。前田幸枝さんの家は空色にペンキを塗った二階建ての木造のアパートになっていた。もう随分古そうだ。そしてその北の木造の家が先生の家だった。先生の日産車の「ノート」の車はなかった。玄関に「山田」と表札がある。チャイムを何回か鳴らしたがやはり留守のようだ。新聞受けには何も入っていなかった。道路へ出て近所の人にも聞いてみようかとふと見ると、道をはさんで丁度先生の家のまわかいの家のおばあさんが庭にでて来た。和子は同窓会をするのでその相談に山田先生のお宅にきたのだけれどお留守みたいです。そう言う

「ああ、山田先生ね、わしもずっと心配してるだけえいだったかねえ、大分前だよコンビニの駐車場で倒れていたんだってよ、車から降りてそのまま倒れたんじゃないかっていったねえ、隣りに車とめてた人が買物おえて車のところへきて倒れてるのみつけただってよ、その人も石部の人ですぐ山田先生ってわかってびっくりして、すぐ救急車呼んだって言うけえが全然意識がなかったそうだよ、大分日がたってるけえが今どうしているずら」和子と梅ちゃんは言葉も出ない。そんな事が先生の身の上に起きていたのか。

「もう一つ教えて下さい。ここ前田幸枝さんの家でしたよね」

「そうだよ、幸枝は用宗に嫁にいったけど二年位前に死んだよ。その幸枝の兄さんがかけ事が好きでとうとう家までなくしちゃっただよ。もう二十年位前だよ、夜にげ同然ででいった金平さんもおかねさんも生きてる

だか死んでるだか、かわいそうにのう」そう言った。幸枝さんの両親の事だろう。

和子と梅ちゃんは、おばあさんにお礼を言って車に戻った。梅ちゃんはもう一度先生の家ちゃんとみてくる、そう言って玄關まで行った。梅ちゃんは家につくまで一言も発しなかった。ハンカチで何度も何度も涙をふいていた。

明日静岡病院へ兄の見舞に行つて、山田先生が入院しているか調べてこよう、もし入院してなければ日赤へも寄つてこよう。

山田先生は静岡病院にも、日赤にも入院していなかった。市内には沢山病院がある、どうしたらいいのだろう。和子は混乱していた。

六月十七日 梅ちゃんの日記

先生の消息不明！ どこにいらっしゃるのか、私がこんなにこんなに先生にお会いしたいのに、先生は今どこにいるのですか。先生は梅子の事、忘れちゃったんですか。先生、先生

六月十七日 和子の日記

私は梅ちゃんがかわいそうでならない。

五月に先生の家へ梅ちゃんが行ったのが、よかったのか、どうだったのか、ずっと考えこんでいる。すぎた事なのね。たった一度切りの愛の交歓だなんて、梅ちゃん悲しすぎるよね。先生の身に今、どんな事が起きているのか皆目見当がつかない。神奈川にいるという娘さんと連絡のとりようもない、娘さんの名前すら知らないのだから。考えてみれば私が三月十八日に先生にお会いしてから、まだ三ヶ月しかたっていないのだ。梅ちゃんと先生が再び会える日は来るのだろうか。



毎朝五時に起きる義母は、ベッドを整え着がえをしてシャンとして部屋から出てくる。

洗面所で顔を洗い、パンパンと顔に化粧水をはたき、新聞をとりて玄関を出て行く。外で自分流の体操をし、七時の朝食までの間、義母はしっかりと新聞を読むのだ。これも毎朝の事だが、和子と梅ちゃんは朝食の準備をする。具沢山のみそ汁、オニオンスライスのサラダ、納豆、ハムエッグと今朝は鰯の西京漬を焼く、デザートはバナナのヨーグルトかけである。毎日三人はこうしてしっかりと朝食をとる。そしてゆっくりお茶を飲む。そのゆっくりお茶を飲んでいる時、義母が

「さっき新聞でみた記事だけど、御飯の後で言おうと思ってたの」そう言って

「和ちゃん、朝刊持ってきて」そう言った。

新聞は朝食のあと梅ちゃんが読み、和子はいつも十時のお茶の時に読む。義母がひらいた頁は訃報欄だった。その中の「お知らせ」という欄に

「父 山田雅之儀

六月二十九日 七十六才で逝去致しました。

葬儀は七月二日 近親者にて相営みました。

ここに生前のご厚誼を感謝し、ご通知申し上げます

静岡市駿河区石部

喪主 山田奈保

とあった。梅ちゃんも和子も言葉がなかった。信じられなかった。一体先生の身にどんな事があり、どんな経緯で先生は旅立ってしまったのだろうか。たった三ヶ月の先生とのつきあい、これから本当のつきあいはじまっていくと思っていたのに…… 三人共まだ片づけていないテーブルの前で唯黙って坐り続けていた。

七月四日の朝刊で山田先生の訃報を知った後、梅ちゃんはその新聞を持って二階の自室へいった。和子が洗い物が終わった後も義母はダイニングの椅子にずっと坐っていた。

義母は先生と梅ちゃんの間係を知った時、梅ちゃんの為にこれから自分に何ができるか一生懸命考えてくれ

ていた。結婚は無理でも梅ちゃんに人並みな夫婦らしい生活を体験させてあげたいとずっと思っていた。

「和ちゃん、たまに先生が泊まれる様に和ちゃんは下の部屋に移ってくれる？」今は義母だけ階下で、梅ちゃんと和子は二階に寝室がある。二階にはもう一部屋あるのだが、今他県にいる和子の一人息子の賢樹が使っていた部屋で書棚、勉強机などそのままになっている。先生が泊る様な事があればやはり和子は下へ移るべきだ。和子に異存はなかった。そんな話を義母としていた矢先に、先生との連絡がとれなくなっていたのだ。

「和ちゃん、今日は先生を悼んで畑仕事はいいにしよう。ゆっくり家の中ですごそうね」義母はそう言った。十時のお茶にも梅ちゃんは降りてこなかった。「そつとしておこう」義母はそう言って梅ちゃんの好きな最中を食べた。

お昼になった、心配していたが梅ちゃんは二階から降りて来た。

「和ちゃん、ごめん新聞読むのおそくなっちゃったね」

「う、うんいいいいつでも読めるから」

「二人共、私の事心配しないでね、大丈夫だから、これが私の運命だから。子供の時から足が悪い事でつらい事が一杯あって、それも全部私が抱えなければならぬ運命だと思ってきたから。人並みに結婚して赤ちゃんも生みたかったけどそれもできなかった。それも私の運命だと思ってきたよ。先生との事だってこうなる運命だったんだよ。先生も七十六才であの世へ行く運命だったんだと思うよ。願わくばもうちょっと早く先生に会いたかったなと思うけどね」梅ちゃんはそう言った。和子はそういう梅ちゃんをみて涙が溢れて止まらなかった。義母も泣いていた。梅ちゃんは、そんな和子と義母をみてこらえきれず大声で泣き出した。あゝ梅ちゃん、可愛想な梅ちゃん、思いっきり泣こうね。三人でしばらく泣いていた。

その日の夕食は

「和ちゃんも梅子も仕度なんてしなくていいよ、特上のお寿司をとろう、酒もいっぱい飲もうじゃないか」義母はそう言った。



「梅ちゃん、今夜は酔っぱらおうぜ」

和子がそう言うと、梅ちゃんは

「お、諒解おいらも飲んだくれてやるぜ」そう言った。釜上げじらすと大根おろし、葉生姜とみそ、鮪の角煮、いかの麹漬、冷奴そんなものを並べ三人はコップに冷酒を並々とついだ。義母は「まずは先生に哀悼の意の献盃だよ、短かいつきあいの先生だったけど気持ちのいい本当がいい人だったね、私も大好きだったよ」そう言った。

お寿司がきた、大皿の特上だ、三人の年寄りでこんなに食べられるのか、三人で笑いころげたと

「さわ子さん、お心づかいありがとうございます、遠慮なくいただきます」梅ちゃんは義母にそう言って、大トロを口にした。

七月四日 義母の日記

今朝の訃報欄で、山田先生の死を知った時の衝撃はどう表現したらいいのだろう。悲しむであろう梅子とどう接したらいいのだろう。とにかく先生の事が何もわからなかった中での訃報である。仕方がない梅子はこの現実を受け入れるしかないのだ。

七月四日 梅ちゃんの日記

先生がおなくなりになった。

新聞に山田奈保って名前の方がそう書いていた。私は自分の部屋でずっと泣いていた。

あの日、先生はずっと離さないよ、そう言ってくれましたよね。ずっとずっと一緒だよって言ってくださいましたよね。先生は私に嘘ついたんですね。嘘つきの先生はキ・ラ・イ。

先生、私もう一回、もう一回でいいから先生とお会いたかったです。

先生、たった一度きりの先生との契り、あれは私の夢の中の出来事だったのでしょうか。

七月四日 和子の日記

先生の訃報は、青天の霹靂だった。私も義母も梅ちゃんの幸せだけを願っていたのに、それもかなわなかったのだ。梅ちゃんは義母や私の前で一生懸命、普通にふるまおうとしているのが痛々しくて、私はすぐ泣いてしまう。

夜おそくまで三人で飲んだ。義母が寝た後も梅ちゃんと飲んだ。梅ちゃんは先生と会えた事は、今まで生きてきた中で一番嬉しかった事だと言った。だって和ちゃん私初めて男の人と抱きあったんだよ。と言った。

「♪泣けた、泣けた堪えきれずに泣けたっけ」と春日八郎の別れの一本杉の一節を大きな声で歌って梅ちゃんは号泣した。

山田先生の訃報を知ってから五日たった。義母と梅ちゃんと和子の三人は、胸の内に抱える思いはそれぞれだが、平穏な日々を送っていた。梅ちゃんが

「和ちゃん、今朝庭に出たらちよっと私が草とりしない間に、かたばみが芝生の中一面に黄色い花を咲かせていてびっくりしちゃったよ。かたばみって小さい雑草だけど、抜いても抜いても絶える事のない雑草でしょ。戦国武将たちは家の存続と子孫の繁栄を願って、この雑草にあやかって「かたばみ紋」にしたんだって。いつか新聞に載ってたよ、花が終わるとすぐ実になって、ものすごい沢山の種をはじきとばすんだよ、草とりしててびっくりした事度々あるよ、しかも地下茎はどんどん伸びるでしょ、芝生の為にはこのかたばみの小さな可愛い花は無用、庭には「雑草魂」は不用だものね。もうじきお盆だし和ちゃん、一緒に草とりしてくれる？」

「うんいいよ、私も気になっていたから、二、三日かかるかもね」和子はそう言った。

義母は縁側の籐椅子で本を読んでいた。二人のやりとりを聞いていて



「無理しないでね、ボチボチやりなね」そう言った。

二人で草とりしながら

「ねえ、梅ちゃん、私も梅ちゃんも田辺聖子の本全部読んでるよね、この頃この人の新刊でてないけどどうしてるんだろう、読みたいよね」

「そう言えば全然名前聞かないね。佐藤愛子は九十才すぎて『九十歳。なにがめでたい』出してるのにね、私っち佐藤愛子の本も全部読んでもんね。田辺聖子って年いくつになるんだろう、多分九十才位だと思うけどね」

せっせとかたばみを草とり鎌でとりながら

「はい今度は和ちゃんの脳トレだよ、答えて下さい。北朝鮮の労働党委員長の名前をいって下さい」

「はい、答えます、キムジョンウンです」

「はい正解、その漢字を言って下さい」

「はい、金旺日の金、正月の正、恩人の恩です」「よく出来ました。それでは韓国の大統領を言って下さい」「はいムンジェインです」「漢字は」「文章の文、存在の在、干支の寅です」「何だ和ちゃん正解だよ、一つ位まちがえてよ」そんなたわいない事をいいあいながら梅ちゃんと和子は、せっせと草とり鎌をふるっていた。

七月九日 義母の日記

結構暑い日だったが、梅子は和ちゃんを誘って芝生の中の草とりをしてくれた。ずっと草とりをしていなかったの草がたくさん生えている。一日では終わらないがこうして梅子が動き出した事が嬉しい。汗を流す事はいい事だ。太陽を一杯浴びる事はいい事だ。梅子、あんたは昔から強い子だった。思いやりのある賢い子だった。人の痛みのわかる優しい子だった。梅子はまっすぐ前をみて進んでいける子だ。梅子が和ちゃんと仲良しなのが私は一番嬉しいよ、ずっと仲良しでいてね。

七月九日 梅ちゃんの日記

日にち薬という言葉を書く事がある、どんなに辛くても苦しくても悲しくても時の過ぎていくうちに少しずつそれらは癒されていくことを言うものだと思う。そうでなければ人は日々の生活を送ってはいけないのだ。本当に自分にとって大切だと思っていた人との別れは、そう簡単には時は癒してはくれないのではないかと。和ちゃんがいつか言った。進さんがなくなって五年たつけど夜ベッドで、進さんの事思っただく事が度々あると。そして一日として進さんの事を忘れた事はないよ、と。

和ちゃんは毎朝仏壇にごはんをあげ、般若心経を唱え、夜寝る前も仏壇にちゃんと挨拶をしてから二階に上がってくる。そして少しの時間があれば写経をしている。

和ちゃんは、自身の心の安穩とこの家の御先祖様への限らない畏敬を持って日々くらししている事が、私にはひしひしと感じられ身のひきしまる思いをする事がある。

考えてみれば、私と先生の関係は、おつきあいしたという程のものでさえない本当にかの間の一期一会であつたと思う。だがたった一度切りの関係だったとしても、私は先生がいておしくてならない。そして先生を好きだったという自分もいとおしくてならない。こうして書いていても涙が溢れてくる。でもそれらはすべて過ぎ去ったこと、これからは自分の人生をあるがまま受け入れながら、おねえちゃんと和ちゃんと三人で仲よく、今まで通り生きていけたらと心から願っている。

七月九日 和子の日記

芝生の雑草が気になっていたが、今日は梅ちゃんが草とりしようと言ってくれた。ああ梅ちゃんが動き出した。嬉しいよ。

草とりをしながら、とりとめのない話をいっぱいした。そして梅ちゃんは言った。



「ねえ和ちゃん、おねえちゃんの前では先生の話はしないけど、先生に会わせてくれてありがとうね。これ本音なんだけど私にあんな経験が一度もなく終わったとしたら、自分が女としてあまりにも可哀想すぎると思うもの、和ちゃん笑うかも知れないけど先生が私に言ってくれた言葉の数々に私は今でも先生の真心を感じているよ。本当に和ちゃんありがとうね。今考えれば先生は身体に何か不都合な所を抱えていたかもしれないね、長い間の一人の生活で食事面、生活面でもいろいろ大変だったかもしれないね、そういうものが救急車で運ばれる様なことになったのかもしれないね、今はそう思うよ」

「そうかも知れないね、長い間のもろもろのものが先生の身体を蝕んでいたのかも知れないね」私もそう言った。私は先生がどこでなくなられたのか、死亡の原因は何だったのか、それらは役所へ行けば教えて貰えるのか、個人情報だといって拒否されるのか皆目わからないが、例えそれ等がわかったとしても、もう二度と先生とお会いする事はできないのだ。何も知らないままで、先生のご冥福を祈って行くしかないのだろうか。私の心は千々に乱れている。

山田先生、短かいおつきあいでしたが私達三人にとっては貴重な日々でした。先生、どうぞ安らかにお眠り下さい。

さあ梅ちゃん、あしたも草とりしようね。義母と梅ちゃんと私、この三人でこれからもしっかり生活して行くね。

明日もきっと晴れるだろう。 完